

雑木林と畑の関係を考えるワークショップ

トトロの里で耕し隊

代表 風間 桃子

埼玉県

1. はじめに

耕し隊の活動は、(財)トトロのふるさと財団のエコミュージアム事業のワークショップ(2001年度実施)が端緒となって開始した。トトロのふるさと財団とは、狭山丘陵の環境保全のためにナショナル・トラスト活動を展開している団体である。このワークショップは、単年度事業として実施され、埼玉県三芳町(くぬぎ山地区の雑木林の所在地)の学芸員を指導者とし、狭山丘陵の伝統的な作物を伝統的な耕作方法で行うという取り組みで、耕作地は所沢市久米の松ヶ丘住宅に隣接した畑(約300坪)である。この畑の所有者松田氏は、山林の一部をトトロのふるさと財団に売却した(トトロの森2号地)地主で、現在は兼業農家であり、耕し隊の活動には多大な支援をいただいた。耕し隊は、このような場と支援者を得て、ハーモニストファンドによる里地・里山保全のための取り組みを行った。この1年間の取り組みにより構成員は当初の10数名から30名弱に拡大し、また狭山丘陵における里山管理の有力な団体として機能するようになった。

2. 活動場所

耕し隊が活動している所沢市久米はトトロの森と呼ばれる狭山丘陵の東端に位置している。畑は鳩峯のヤマと八国山にはさまれた谷部分にあり、1960年代までは所沢市で一番広い田んぼがあった。畑の資材を調達しているトトロの森2号地も、鳩峯のヤマにあり、最近まで管理されていた雑木林である。現在、田んぼと八国山は住宅地になっている。

狭山丘陵は、埼玉県と東京都にまたがる丘陵地である。斜面を利用した畑作地域で、丘陵地はコナラやクヌギが多い雑木林であり、農用林として農業と人々の暮らしに利用されてきた。戦後、都心に近いということから、若い労働力が東京方面へ流れ、逆に、都心から通勤圏内であることから、畑や林は宅地となり人が流入した。この結果、農業の担い手は高齢化し、省力化のため畑には農薬や化学肥料が投入された。雑木林の管理は後回しになり、放置され、さらに相続税のために切り売りされ、開発されている。もともと住んでいる農家中心の旧住民と、流入してきた新住民が入り混じり、従来のコミュニティーが崩壊しつつある。都市近郊に特徴的な里山の状況といえるだろう。

3. 里山の保全と里地

狭山丘陵周辺における主要作物は、サツマイモと麦(大麦、小麦)だった。これは、代表的な関東ロームによる火山灰台地が多くをしめる関東平野周辺の平地に特徴的な農耕形態といえる。つまり、膨軟ではあっても、水分と燐酸吸着というデメリットを有する火山灰由来の台地上の土壌がその多くを占める狭山丘陵では、水田耕作が困難で、かつ栄養分の供給が十分に行われないことから、根菜類の栽培が盛んであった。特にサツマイモは、比較的窒素分の少ない土壌で大きな根茎を得ることができることから、この地域の夏の主要作物として栽培されてきた。有名な川越芋は、この地域の農作物集荷所が川越にあったことから付けられた名称であり、所沢周辺のサツマイモも同じブランドで出荷されている。

また、麦は米に代わる主要穀物として、陸稲とともに栽培され食べられてきた。戦後も、普段は押し麦の麦飯で、人が集まるときや物日にうどんをつくったということである。現在でも、地元の家にはうどんを打つ道具があり、人が寄るときにはうどんを振舞う。粉食文化は、うどん、すいとん、ゆでまんじゅう、ふかしまんじゅう、あわもちなど粉にまつわる多くの食べ物にあらわれている。これは、狭山丘陵周辺に製粉所、製麺所、うどん屋が多いことでもわかる。

伝統的な夏のサツマイモ、冬の麦作は、連作が可能という長所もあり、私たちも、サツマイモと麦を中心とした作付けにした。

狭山丘陵では、里山の管理により得られた落ち葉や材を、里地における畑作のみならず生活に利用してきた。林は15から20年に一度薪材として伐採され、萌芽更新により再生され、その落ち葉が里地の耕作地の肥料として用いられた。落ち葉は、米ぬかと水を加え醗酵させ、その醗酵熱を利用したサツマイモの苗床作りは、発芽に最適な環境を提供し、早い時期に少ない種芋から多くの苗を提供した。その過程で、所沢や川越などの都市からの有機質の廃棄物や、家畜の糞尿などを循環利用し、農作物として都市に供給してきた。このような、都市－里山－里地の循環の重要な役割を里山の耕作地が担っており、その保全がなければ里山の管理は持続しないということがあらためて明らかになった。

4. 年間活動報告

耕し隊の活動は、トトロの森2号地及び松田氏所有地からの落ち葉及び材を燃やした木灰（カリ分：根菜類に不可欠）、及び米ぬか、油かすなど、基本的には里山の管理からでた資材と最小限の購入資材（除化学肥料、農薬）により農作物を栽培し、そのような山の恵みを食べ、それをもとにイベントを開催し、一般の参加者にも里山・里地の

管理の大切さを知ってもらおうということを目指している。サツマイモなどの根菜類の栽培にはカリ分が不可欠であるが、これは、耕し隊の姉妹団体である「トトロの森で何かし隊」の里山管理の結果得られた灰や、狭山丘陵で活動している「ふれあいの里炭焼きの会」からの提供で賄った。

延べ活動日数：26日（集合活動日のみ、これ以外に各自適宜活動した）

延べ参加者数：206人

作付け：サツマイモ、ジャガイモ、インゲン、ニンジン、トウモロコシ、ネギ、タマネギ、小麦、ダイコン、エダマメ、サトイモ

活動：作物の作付けと収穫、土づくり、堆肥づくり、草むしり、土留め補修、松田氏畑の補助、トトロの森2号地および松田氏所有のヤマの管理作業、落ち葉はき、イベント開催など

イベント：7月カレーライス作り、10月イモ掘り、11月うどん作り、12月餅つき、1月落ち葉はき

5. 里山管理の特徴とボランティア活動

(1) 里山管理

里山管理は、畑の作業が一段落する12月から始まる。12月中に林の下草を刈る。これはクマデがひっかからないようにするためである。さらに、葉が全部落ちきり、雪が降り始める前の1月中に落ち葉はきをする。落ち葉が濡れると大量に運搬することができず、作業効率が悪いからである。

この時期は、畑の作業はほとんどないため、メンバーは総出で里山に入り落ち葉をはき、次年度のための堆肥づくりをした。

また、サツマイモの苗床を作ることは事実上素人には困難なため、農家の里山管理を手伝い、そのかわりに、サツマイモの苗をいただいた。そのような農家は人手が確保できないことから、当団体のような素人集団でも、里山管理作業の補助を歓迎してくれた。

このように、里山管理の補助をしながら、次年度の肥料（落ち葉堆肥、木灰）を得、またサツマイモの苗や、その他無形の指導を受けることができています。なお、落葉はきの効率化のためには、夏期、秋期の下草刈りが非常に有効で、その作業も耕し隊のメンバーで手伝うこととした。お互いの信頼を、体を動かすことで得るといことがとても重要だとわかった。

（2）畑地耕作の特徴

活動期間は、春期（3月～6月）及び秋期（10、11月）に集中することとなった。これはサツマイモの生育特性による農作業の省力化の結果にも大きく依存している。畑の作業は、植え付け（春期）、除草（春期～夏期）、収穫（秋期）の3つの繁忙期があるが、サツマイモは夏期に葉を畑一面に茂らせるため、除草の必要がなく、あまり害虫や病気にも罹患しないことから、夏期の作業がほとんどいらぬという特徴がある。一方、参加しているボランティアは、夏期は夏休みに入り行事が多く参加しにくい状況がある。また、夏期は体力的にも昼間の畑作業が困難であり、参加者の健康に責任を持っていないという面もある。以上から、サツマイモ栽培は都市住民を主体としたボランティア活動に適しているということがわかる。

また、麦栽培は、畑地の余分な窒素分を除去し次年度のサツマイモの生育が促進されるばかりでなく、冬期間の土壌の風食を防止し、秋の焼き芋と冬のうどん作りというイベントを提供してくれる。冬期間は、比較的休日の行事が少なく、メンバーの出席率があがる。作業も落葉はきや切り返し、麦踏みなど比較的容易な作業が多く、ダイコン、ネギなどの収穫も定期的に行える。うどん打ちの他、餅つき、けんちん汁作りなどを行うと、天気のいい穏やかな日などはかなり多くの参加者を得ることができた。

（3）畑地耕作に不可欠な要因

私たちがこの活動を継続できている背景には以

下のような要因がある。

a) コーディネーター

耕し隊には、トトロのふるさと財団の職員が参加し、耕作指導、地主との調整、資材の調達などを担当している。保険の付保や、イベントの広報はこのコーディネーターを通じてトトロのふるさと財団より行った。

b) 土地所有者の支援

土地所有者の松田さんからは、耕耘機、農機具、保管場所、水、トイレの使用、ミーティングやイベント時のはなれの提供をしていただいた。また、伝統的な耕作方法について、指導してもらった。

一方、松田さんは給与所得者であり、すべての畑地を耕作する余裕はなく、事実上私たちの耕作している畑地は放棄されていた。そのような放棄耕作地の管理を代行し、壊れた土留めの修繕なども積極的に関与することにより、相互に利益が得られるようにつとめた。宅地が虫食い状に存在している所沢市郊外には放棄耕作地も多く、里山だけではなく里地景観を損なう主たる原因にもなっている。このような放棄耕作地の管理をどのように進めていくかが今後の所沢市周辺のみならず里山の景観保全の重要な課題になるものと考えられる。

c) 里山との連携

畑地を継続管理していくためには、里山の管理作業で大量の枝や材を燃やして得られる木灰が必要である。また、竹、粗朶（そだ）、などの資材を得ることも経費節減になる。里山と畑は旧来お互いに依存しあい、切っても切れない関係の中でエネルギーと資源の循環が行われてきた。このような山林を、ナショナル・トラスト地及び個人所有地を組み合わせることで確保していく必要がある。つまり、このような畑を管理している団体があれば、相当程度の里山を維持・管理することが可能であるといえるだろう。

6. 里地と里山の管理について（資源を循環させるとりくみ）

耕し隊は、この1年間の活動を通じて、次のような糸口をつかんだ。

(1) 狭山丘陵の火山灰台地における里地と里山の管理には、伝統的な「サツマイモームギ」連作が有効であること

ボランティアが多忙で、かつ夏期の重労働となる除草が不要であるサツマイモ栽培の特徴は、市民による畑作に欠かせないものであることがわかった。また、冬季の麦栽培は麦刈り、うどん打ちなどのイベントにつなげやすく、さらにボランティアの輪を上げることができると考えられる。

(2) 市民の参加の促進

市民参加には、農作業や里山管理に参加する方法もあるが、子供が小さい、身体が虚弱であるなどのハンデがある人にも、イベント参加などによる活動への参加が考えられる。どんなかたちであれ参加を促進することは、市民の理解の促進ばかりでなく、日頃地味な活動が主なメンバーにも張り（芋を掘って子供が喜んだ、など）を与えてくれる。

(3) 作物の活用

この2年間（トトロワークショップ及び本年）の落葉投入により、収穫量が大幅に向上した。このような農作物を使って、資材費、種子代、トラクターの燃料代などを捻出することができれば、真に独立した活動ができるのではないかと考えている。今回のファンドで必要となった経費のうち、毎年必要となる経費部分を精査し、その相当額を補填できるような仕組みを考えることで、継続的な活動が可能となると考えている。

また、一般参加者を対象としたイベントに限らず、けんちん汁、焼き芋、ふかし芋、うどん、カレーなど、食べ物を提供する活動日には、驚くほど多くの参加者を得ることができた。畑の一隅で調理をする作業のため、少なくとも1名は農作業に参加できなくなるが、手馴れたメンバーが調理にあたることにより、参加人数が大幅に増加して

きた。

7. 最後に

耕し隊のメンバーは、この1年間試行錯誤を重ねながら活動を行ってきた。タカラ・ハーモニストファンドは、そのような活動で最も不足していた活動経費をほぼすべてカバーし、この活動を軌道に乗せることを可能にしてくれた。私たちは、この1年間の成果を検討し、来年以降の活動をさらに充実したものにしていきたいと考えている。もちろん、そのために解決しなければならない問題は多々あるが、この1年間の活動で、少なくとも里山の資源の循環のためには、それを食物に変換する畑地の役割が必要であり、そのような活動は、冬期間の里山管理と春期から秋期にかけての畑の作業と相互補完的であるということを実感した。私たちの掲げた「畑を耕し、里山の恵みをおいしく食べる」を里地・里山の資源循環の糸口として、広く市民の参加を促しながら、里山を生かすための畑耕作を続けていきたいと思う。それが、放棄耕作地の有効活用や、子供の循環教育の場として、ひいてはコミュニティーの構築につながることを願ってやまない。



5月 土留め補修



6月 麦刈り



6月 脱穀、とうみ



7月 ジャがいも掘り

11月 麦まき



1月 落ち葉掃き

8月 さつまいもの状況



11月 うどん作り



10月 いも掘り



12月 餅つき



2月 落ち葉切りかえし



3月 麦の成長